



大泉小だより

令和6年9月30日
練馬区立大泉小学校

子供たちの笑顔を探して、学び方を考える

校長 小高敏男

やっと暑さも和らいできました。読書の秋・スポーツの秋です。子供たちには、様々なことに挑戦してほしいと思います。子供たちの「挑戦」の原動力を考えたとき、大切にしてほしいことは、「楽しい」「夢中」ということです。「楽しい」の「楽」は「らく」とも読み、よいイメージと悪いイメージ、両方のイメージをもつ人も多いのではないのでしょうか。そこで、今回は、「楽しい」と「らく」について考えてみたいと思います。

ある数学者が、『私は、毎朝出勤するときに、「今日も難問に挑戦できる。」といううれしい気持ちになる。何十年も同じ難問に取り組んでいる。』と話されたと言います。私は、それを聞いたときに、何十年と頑張っても解けない問題に取り組んでいるこの数学者のことを「すごい」と思うと同時に、続けられる原動力は何かと考えました。みなさんは、どのように考えますか。

その数学者にとっては、難問に取り組むことが仕事となります。では、なぜ数学者が何十年と続けられるのかと考えると、それは数学が楽しいからではないでしょうか。解けなくても数学的思考をしている行為が楽しいのではないのでしょうか。私の仕事である教育にも終わりはありません。そして、子供たちのために日々よりよい教育活動となるよう取り組み続けています。取り組んでいる質と量、数学と教育という違いはあると思うのですが、取り組んでいる方向性は同じだと思います。

子供たちの学びに置き換えて考えてみるとどうでしょうか。ややもすると学習の結果を求めすぎているために、学習そのものの楽しさを感じない場合があるかもしれません。算数でいえば、答えが分かるか分からないか、解けるか解けないかだけを求めてしまうということです。数学的思考をする楽しさを味わっていないのです。もし答えが分からなければ、答えを知ってからなぜその答えになるのかを考えることが数学的思考です。つまり、プロセスが大事なのです。

では、楽しいとは何でしょうか。「楽」は「楽しい」とも「らく」とも使いますが、同じ意味なのでしょう。もし、同じだとすると、数学者が何十年も取り組んでいることは「らく」なことなのでしょう。

「らく」を「簡単」と捉えてしまうと、「安易」な方向に向かう場合があります。算数でいう「答えさえ分かればいい」ということです。しかし、「らく」を「心地よさ」と捉えると、算数の「らく」は「合理性」と捉えることができるのではないのでしょうか。安易に公式の意味も考えずに当てはめて答えを出すのではなく、より正確で合理的な答えの導き方を見つけたときに「心地よさ」を感じるのではないかと思います。それが「楽しい」に通ずるのではないのでしょうか。

教育や子供の成長においても、この「らく」を取り違えてはいけなく考えます。

この「らく」を安易な「簡単」と捉えた場合、授業は先生の説明を聞いているだけの受け身の学習となります。しかし、そのような学習で子供たちは「楽しい」と笑顔にはなりません。聞いているだけでは、つまらないでしょう。テレビならチャンネルを変えられますが、授業は変えられませんから、不平不満となるし勝手なこともしたくなるでしょう。

「主体的に学び合う児童」を目指している本校では、子供同士で指名し合いながら集団検討をしている場面や、互いに教え合っている場面を見かけます。そんなときの子供たちの表情は、真剣であったり楽しそうであったりします。自分自身で仲間と学び合っていることが、楽しいのです。

卒業文集の題材として、体育学習発表会や移動教室が多いことも同じです。それだけ心に残るからです。体育学習発表会では、自分たちの演技をよりよくするために、自主的に練習をしたり、自分たちで教え合ったり、オリジナルの踊りを考えたりします。移動教室では、布団準備にしても食事にしても、バスレクにしても、何事も自分たちで協力し成し遂げることが求められます。受け身ではなく主体的だからこそ、よい思い出になるのです。もし、受け身だとすると不平不満が出ることでしょう。そして、「つまらなかった」という思いが残るでしょう。

子供たちが学びを通して笑顔になるためには、先の数学者のように、学びそのものの楽しさを十分に味わい、体育学習発表会や移動教室のように、主体的に仲間と共に学び合う学校教育活動にしていくことが大切であると考えます。